「ＷＨＯ多国間研究：ドメスティック・バイオレンスと女性の健康」プリテストを実施して

研究協力者　林　　文（東洋英和女学院大学教授）
研究協力者　釜野さおり（国立社会保障・人口問題研究所室長）

私たちの研究チームでは、ＷＨＯ企画の多国間研究プロジェクトの一環として、女性の健康とドメスティック・バイオレンス（以下ＤＶ）についての調査を行う計画である。この多国間研究プロジェクトは、ＷＨＤ／ＷＨＯのチーフを頭に、ＤＶ研究の専門家からなる運営委員会およびテクニカル・アシスタンス・チームによってコーディネイトされている。1999年２月現在で、同多国間研究に参加が確定している国（地域）は、ブラジル、ペルー、ナミビア、タイ、太平洋諸島の国々（フィジー、マーシャル・アイランドなど）、そして日本である。

日本チームでは、本調査に向けての準備として、ＷＨＤ／ＷＨＯ(Global Programme on Evidence for Health Policy)が開発中のＤＶコア調査票を用い、1999年１月から２月にかけて女性27人を対象にプリテストを行った。以下に、そのプロセスと得られた知見をまとめる。

１．ＤＶコア調査票とその構成について

ＤＶコア調査票（英語）は、多国間研究プロジェクト運営委員会とテクニカル・アシスタンス・チームが女性への暴力、リプロダクティブ・ヘルス、メンタル・ヘルスなど、様々な分野の学者たちと議論を重ね、開発された。今回プリテストに使用した1998年12月版は、ＷＨＯ倫理委員会の承認も得ている。調査票は、A.世帯抽出用の票、B.世帯内対象者選択用の票、C.世帯質問票、D.女性用質問票からなっている。女性用質問票は12部からなり、200以上の質問項目からなる。女性用質問票の構成は次の通りである。

第１部回答者とコミュニティー
第２部生殖の経歴
第３部健康と医療サービスの利用
第４部現在のまたは以前のパートナーについて
第５部子どもについて
第６部女性の役割と暴力を受けることについての意識
第７部現在のパートナーとの関係
第８部現在・以前のパートナーからの暴力の経験
第９部暴力によるケガと医療サービスの利用
第１０部暴力のパターンとそれに対する対処
第１１部パートナー以外の人からの暴力
第１２部経済的自立

これらの調査項目は、多国間研究で明らかにしたい11の点について、それぞれ次の様に割り当てられている。（調査票は内部資料扱いなので、現段階では質問文を掲載することはできない。）

（１）それぞれの母集団（日本の調査の場合は横浜市）において、身体的暴力を受けた経験（15歳以上）を持つ女性はどれくらいの割合でいるか（発現率）、またどの位の頻度でそれを受

けているか。
Q143現在・以前の夫・パートナーからの身体的暴力
Q190その他の人からの身体的暴力の経験
この一年間における被害経験：一度、数回、何度も
それ以前の被害経験

（２）それぞれの母集団において、どのくらい割合の女性がどの頻度で、意に反して性交を強要されているか。何歳の時に起こり、主な加害者は誰か。
Q191性的関係の強要された経験（12歳以上）の有無
Q19412歳以下で性的接触を強要された経験
Q198はじめてのセックスが強要であったかどうか
Q221調査員にも回答がわからない方式での性的強要についての質問

（３）それぞれの集団において、どの程度の発現率と頻度で、ＤＶの被害経験のある女性がいるか。また妊娠中の暴力はどの程度起きているか
Q143パートナーからの身体的暴力
Q144パートナーからの性的関係の強要
Q147－149妊娠中の身体的暴力
（質問番号なし）「暴力の被害の有無を記録するチャート」

（４）家庭内で、子どもを含む他の人達に、どの程度ＤＶが目撃されているか。
Q168子どもによる目撃などの有無
Q169子どもの反応
Q177暴力を受けた・受けていることを知っている人が他にいるか

（５）ＤＶに遭ったことは、女性の身体的、精神的、妊娠出産にかかわる病気やヘルス・サービスの利用状況などの指標と、どの程度関連があるのか。
Q58－72健康状態と医療サービスの利用状況
Q155－164暴力によるケガと医療サービスの利用状況
Q172暴力が自分の健康に影響してるか
Q47－50妊娠の経歴

（６）ＤＶは女性の生活の様々な側面にどのような影響を与えるか。労働能力、家族の世話をする力、共同体での相互関係への影響はどの程度か。
Q173借金の有無、自分の貯金を使うか
Q174,175家事、家の外での仕事への影響
Q65過去一ヶ月間で、日常的な活動への影響
Q20外での集まり参加への影響
Q216パートナーに収入や貯金を使われた経験

（７）ＤＶは、彼女らの子どもにどういう影響をもたらすか。出生体重、就学の有無、又は子どもの家出などに影響はあるか。
Q109－Q115子どもの家出、学校での問題など
Q176子どもに影響があると思うかどうか

（８）様々な状況の下で起こるＤＶは、どんなコミュニティ要因と結び付けて考えられるか。例えば、犯罪レベル、男性同士の暴力、経済的不平等、女性にとっての離婚のしやすさや子どもの後見、暴力が起きるときの隣人や友達、家族などの一般的介入の程度などの因子に関連があるか。

世帯票社会経済的地位、医療サービスなどの有無、犯罪

Q1－Q5地域の特徴（近所関係など）

Q96,Q97男性間の暴力

Q116－Q130ジェンダーに関する意識

Q178暴力への介入の有無

Q200－Q220女性本人の経済的自立

（９）様々な形態の家庭で起きる女性への暴力に、どんな家族の要因や個人の要因が関係しているか。例えば、資源へのアクセスやコントロール、家族や友達の介入を進んで受け入れること、他の加害行為を受けた経験があること、公的、私的を問わずなんらかの援助を受けたことがあるかなどの因子に関連があるか。

Q14－Q19親せきとの関係、助けてくれる人の有無、女性団体に属しているか

Q123,Q124母親が暴力の被害に遭っていたか、それを目撃したか

Q200－Q220女性本人の経済的自立

（１０）パートナーに暴力を向ける男性に関連するどのような個人的な因子があるか。例えば、子どものときのＤＶの目撃、最近の地位を失う経験、他の男性へ向う暴力、凶器の所有、アルコールや他の薬物の使用の程度などの因子に関連があるか。

Q89就労形態、仕事の満足度

Q90家の中でのパートナーの役割

Q92－Q98アルコールや覚醒剤など薬物の使用

Q125,Q126パートナーの母親が暴力の被害に遭っていたか、それを目撃したか

Q131－Q138パートナーとの間の力関係とコミュニケーション

（１１）暴力を止めさせたり、弱めたりするために女性はどのような戦略を使っているか。加害者から仕返しに虐待を受けたり、暴力関係がそのままになったり、家族、友達、援助機関に助けを求めた経験のある女性はどの程度か。

Q170,Q171防衛的暴力の使用の有無、自分からの暴力の有無

Q179－Q189どこに助けを求めたか、なぜか、サービスに満足したか、行かなかった理由、どこに援助して欲しいかなど。

２．日本プリテスト用調査票の準備

ＷＨＤ／ＷＨＯが開発中のＤＶコア調査票は、ＷＨＯ倫理委員会で承認を得た後、1998年１２月末に参加国に配布された。日本チームではその調査票を日本語に翻訳し、研究会メンバーで内容の検討を行った。本プロジェクトは多国間研究であるため、多少日本に不適切な質問であっても、この段階で大幅に変更することはできないが、研究チームで最低限必要であると判断した調整は行った。また、各国で、独自の質問を追加してよいことになっているので、日本で追加したい内容の質問も加えて、日本プリテスト用調査票を作成した。

今回調整した部分は以下の通りである。

（１）女性用質問票のみの使用

前述の通り、ＤＶコア調査票はA.世帯抽出用の票、B.世帯内対象者選択用の票、C.世帯質問票、D.女性用質問票からなっているが、AからCは、住民票などがなく、個人単位でのサンプリングが簡単にできない国を想定して作られたものなので、日本プリテスト用調査票では、世帯の経済状況などの必要と思われる項目は女性用質問票に組み込み、それ以外の部分はカットした。（ＷＨＤ／ＷＨＯスタッフの承諾済み。）

（２）質問群と質問の順序の入れ替え

ＤＶコア調査票では、回答者の年齢や近所との関係などをたずねる第１部の後、すぐに出産の経験や避妊についてたずねる第２部がきている。第２部は、かなりプライベートなことをたずねており、調査の始めにはふさわしくないので、回答者への最低限の配慮の意味で、より一般的な差し支えのない質問を扱う第３部、第６部を先に持ってきて、妊娠出産のことはあとに持ってくることにした。したがって、日本プリテスト用調査票の質問群の順序は、下記の通りである。

第１部回答者とコミュニティー
第３部健康と医療サービスの利用
第６部女性の役割と暴力を受けることについての意識
第２部生殖の経歴
第４部現在のまたは以前のパートナーについて
第５部子どもについて
第７部現在のパートナーとの関係
第８部現在・以前のパートナーからの暴力の経験
第９部暴力によるケガと医療サービスの利用
第１０部暴力のパターンとそれに対する対処
第１１部パートナー以外の人からの暴力
第１２部経済的自立

その他、子どもの時暴力を目撃した経験の質問などが、第６部の女性の役割の意識の所に含まれているので、流れをスムーズにするために、第８部の暴力の経験の質問の所に移動した。

（３）他国との制度や社会経済状況の違いにより、日本には適用しない質問の削除・変更

質問の中には、日本以外の参加国の社会制度や経済状況を前提として書かれているものがある。これらの質問は、日本語に翻訳してたずねても、意味がないので、削除するか、たずねたい概念が明らかな場合は、同機能を果たすだろう質問に変更した。それらの例は下記の通りである。

・日帰りで行かれる所に親せきがいるか、の質問は、日本の場合、飛行機や新幹線を使えばほとんどの所にアクセスできるので、「一時間以内で行かれる所」に変更した。
・重婚、ダウリーなど日本に存在しない「制度」についての質問は省略。（今後、ＷＨＤ／ＷＨＯのスタッフと話し合い、これらの質問で測定したい概念を明確にした上で、必要があれば、それと同様の内容をたずねる質問を設定することもあり得る。）
・学校に行ったことがありますか、の質問を省き、最終学歴をたずねる質問のみとした。
・各世帯の経済状況を測るため、家畜、電気製品などの所有の有無を聞いている質問は、収入

と住居形態（一戸建て、賃貸など）の質問で代用した。（これについての結論は現在検討中。）

・「夫またはパートナー」との関係に限って調査票が作られているが、他の参加国に比べ、日本の結婚年齢は高く、また未婚で男性とつきあう女性が多いので、「恋人」との関係についてもたずねるように、必要な箇所では質問を変えた。日本における先行研究でも、同居していなくても、恋人としてつきあっている男性から暴力を受けている女性がいることもわかっている。

（４）追加した質問・選択肢

・避妊についての質問は、女性が主体となって行うことを前提に書かれているが、男性がコントロールするコンドームの使用が主である日本の状況に合わせて、変更と追加を行った。

・ＰＴＳＤ（ポスト・トラウマティック・ストレス・ディスオーダー）の尺度の追加
先行研究では、ＤＶの影響は、女性の身体の健康状態のみでなく、ＰＴＳＤのような精神的健康へも影響するとの結果も出ているので、それを捉えるためにＰＴＳＤ尺度を追加した。この尺度は、集中しようとしてもできなかった状態、大切だったことに興味を失った状態、物音に普段より驚きやすい状態などが２週間以上続いたことがあったか、などの質問からなっている。

・夫・パートナーの自由時間の過ごし方の選択肢に、日本の現状に沿った活動を追加した。

・暴力によって起こったケガの質問の選択肢に、「耳の鼓膜を破られる」を追加した。

・ケガの重度を測るために、全治に要した日数の質問を追加した。

・医療関係者に話したかの他に、あちらがたずねたかどうかの質問を追加した。

・暴力にあい、助けを求めて支援機関などに行かなかった理由に、自分にも悪いところがあると思った、助けを求めるという考えが浮かばなかった、我慢すればすむこと・なんとかできると思ったなどの選択肢を追加した。

・女性が外に援助を求める他に、暴力への対処として、自分でやったこと（情報を得る、相手に問いただす、彼に専門家の援助を勧める、自分の気持ちをリラックスさせた、パートナーの良い面に注目したなど）についての質問を追加した。

これら以外にも、細かい言い回しなど、意味が変わらないと判断した上で、変更した部分もある。

３．プリテストの目的

今回プリテストに使用したＤＶコア調査票（1998年月12版）は、ドラフトの段階であり、本調査に向けて、各国でプリテストを行い、その結果を踏まえて運営委員会とテクニカル・アシスタンス・チームで修正して行くことになっている。WHＤ／WHＯの研究プロトコルでは、プリテストについて次のように述べている。

「英語から（日本語に）翻訳した調査票を使い、身近にいる比較的容易に頼める女性を対象にし、プリテストを行う。できる限り、年齢層や社会背景が異なり、虐待の経験も異なる女性を含むことが望ましい。この過程で、調査票の内容に関連したいろいろな問題について検討する（下記チェックリスト参照）。この段階では、回答者には、質問に答えてもらうだけでなく、それを通して質問がわかりやすいかどうか、受け入れやすいかどうか、また、質問文の読み方などについても意見を言ってもらう。」

＊プリテストのチェックリスト：
（１）使われている用語や表現は適切か
（２）さまざまな背景を持つ人に理解できるものか
（３）調査票の流れ、使いやすさ
（４）軽度の身体的暴力を捉えることができるか
（５）重度の身体的暴力を捉えることができるか
（６）さまざまな形態の暴力について、頻度の測定が適切であるか
（例えば、この一ヶ月、この一年、今までに、というのでよいか）
（７）調査票によって、理論的な枠組みがカバーされているかどうか、それぞれの部分に適切な指標が使われているか
（８）調査票の長さ、わかりやすさ、および質問が回答者に与える印象
（９）この研究テーマや調査の焦点を回答者はどう受け取るか

これらの点を念頭におき、５の要領でプリテストを実施した。

４．プリテストの実施

（１）協力者

研究プロトコルにあるように、プリテストの段階では、回答者を無作為抽出する必要はないので、研究協力者の知人関係を通じて、分かる範囲で、できるだけ背景の異なる方達にコンタクトした。プリテストにはＤＶのサバイバーが必ず入る必要があるので、サバイバーが作るサポートグループにもコンタクトし、数人の協力者を募った。結婚していない人や年齢の低い人も含む必要性から大学生にも数人コンタクトした。その結果、計27人からプリテストの協力を得られた。

（２）依頼状の発送

電話やファックスで大枠を話し、協力の承諾を得た上で、スケジュールを調整し、正式な依頼状を発送した。

（３）同意書の準備

このようなセンシティブなテーマで調査を行うことに関し、ＷＨＤ／ＷＨＯ多国間研究プロジェクトでは、回答者に調査のことを説明し、調査に参加することへの同意を得る、また、いつでも止めることができる旨を伝えるなど、調査上の倫理的な配慮を十分に行うことを重視している。そのために、「同意書」を準備して、面接開始前に調査員が読み上げることになっている。プリテストでは、ＷＨＤ／ＷＨＯから例として送られてきた本調査用の同意書を日本チームでアレンジして使用した。また、前半にプリテストを受けた方の意見を参考にし、途中で同意書にいくつかの修正を行った。

（４）面接調査の実施
＊実施期間：1999年１月24日～２月８日
＊実施場所：神奈川県立かながわ県民活動サポートセンター
茅ヶ崎市立図書館
茅ヶ崎市勤労市民会館

東京ウィメンズプラザ

＊面接員：日本研究チーム（秋山弘子、戒能民江、林文、ゆのまえ知子、釜野さおり）

＊協力者について

プリテストに協力して下さった27人のプロフィールは次のとおりである。

年齢：１９歳～４８歳（１０代１人、２０代６人、３０代９人、４０代１１人）

婚姻状況：未婚６人、既婚１２人、離婚後独身７人、死別後独身１人、事実婚１人

就労形態：フルタイム、産休中、パート、専業主婦、非常勤職員、大学生、大学院生

ＤＶの経験：４人は事前にあることがわかった上で協力を依頼した。この方達も含め、27人中、プリテストで夫あるいはパートナーから、性的暴力、身体的暴力を受けたことを話したのは７人、対物破壊の形での暴力を受けたのは１人であった。

＊お礼状の発送

プリテスト終了後、参加者全員にお礼状を発送した。特に、プリテストを受けた後、いろいろな記憶がよみがえって、気分を害する場合もあるので、それに対しての配慮を行った。

５．プリテストから得られた知見

日本プリテスト用調査票を用いて２７の面接調査を行い、協力者からいろいろな意見を得ることができた。

（１）調査票の長さおよび流れについて

①この調査票は長すぎる、という意見は研究メンバー全員が一致した。プリテストでは、質問についての意見をたずねながら進めたことを考慮しても、ＤＶの経験がある人では90分から120分、そうでない人の場合でも50分から90分の時間を要した。理想的には、60分から90分で終わる調査票にする必要がある。

②質問の流れは大体よく、スムーズだったという意見があった。

（２）調査票全体に関わる内容や言葉使い

①質問や選択肢がいかにもアメリカ的であるという意見があった。これは翻訳だけの問題でなく、内容の面でもそうであるため、今後検討し、他国との比較との兼ね合いを考えながらより自然な表現ができるように検討する必要があろう。

②内容も全般的にわかりやすかった、内容が興味深いというポシティブなコメントもあった。

（３）各質問・質問群について

第１部

①地域・近所同士で助け合うか等の質問は、選択肢は、頻度よりも、どんな場合に助けを期待できるかのような聞き方の方がよい。

②社会的サポートがあるかどうかをたずねる質問で、一時間以内で行かれる所に住んでいる親せきの人数をたずねているが、それは人数でなく、何家族いるかというのでいいのかよくわからない。また、物理的距離だけでなく、つきあいがあるかをたずねることが重要ではないか。

③実家の人達との交流について、電話で話すという選択肢が欲しい。

④結婚式をあげたか、という内容の質問があるが、結婚式をしたので社会的にも認められている関係である一方、家制度からの束縛という場合もあるので、式をしない方が夫婦間の自由を意味するとも取れる。（これについては、WHD／WHOテクニカル・アシスタンス・チームに相談し、この質問がたずねたいことを理解した上で、日本の状況にあった質問に書き換える。）

⑤「ボーイフレンド」という言葉を使った質問があるが、それでは親密な関係に限っているのかどうかがわからない。

第２部

①死産、流産についてだけでなく、人工中絶経験の有無についてもたずねて欲しい

第３部

①健康上の問題については、いろいろな症状たずねているが、明らかに病名がわかっている場合もあるので、それを最初に聞くべきではないか。

②この一ヶ月、というききかたで健康状態についてたずねているが、冬では、風邪などの理由があるので、状況が特異になるのでは、という意見。（これについては、調査時期は皆共通しているので、風邪であっても特異にはならないと考えられる。また、ＤＶのサバイバーの方が抵抗力が弱くなっていて、風邪を引きやすいのであれば、ＤＶサバイバーの方にいろいろな症状が多くみられることには変わりないので、それでよいとも考えられる。しかし、一通り、他のリスクファクターをコントロールするための情報は得ることは必要で、病名、出産したかどうかなどをたずねる質問を入れることは重要であろう。）

③日本用に追加したＰＴＳＤの質問はとても答えづらい。また、答えたくないものもある。

④薬代の支払いの質問があるが、目的がわからない。

⑤「女性と健康」のテーマであるのなら、生理や更年期に関わる問題も含んだらどうか。

第４部

①現在のあるいは最も最近の夫・パートナーについていろいろとたずねているが、例えば再婚している場合など、以前の夫・パートナーが暴力を振るっていた場合、以前の夫・パートナーについても聞く必要があるのではないか。

②仕事について、好きというのと不満というのを同じ尺度でたずねているのがおかしい。

第６部

①女性の役割の質問は答えにくかった。理想をきいているのかわからない部分がある。

また、選択肢が「はい」「いいえ」だけなので、「人による」「場合による」などの回答ができない。

第８部

①パートナーの良いところ、というのは答えにくい。夫、父、世間からみて、人間としてなどいろいろとあるのでどのレベルで答えたらいいのかわからない。

②暴力については、精神的な暴力については、「無視される」「相手にされない」なども含めて欲しい。また、言葉の暴力についても、もっとたずねて欲しい。（調査の目的かかなり身体的な暴力の被害にあっている女性がどのくらいいるか、に焦点をおいているので、多国間研究全体では無理だろうが、日本の調査には含むことは可能であろう。）

③身体的な暴力でも、一方的でないとっくみあいなどもあるが、それはどう扱ったらいいのか。

④身体的な暴力の質問は、表現が直接的過ぎるのでは。

⑤「暴力の被害の有無を記録するチャート」では、「結婚したか」「今も一緒か」などをきいているが、紛らわしく、答えにくい。

⑥以前つきあっていた男性との関係については、結婚している場合は、答えたくない。

⑦暴力に関して、セックスの強要の質問がいくつもあったが、何人からは、セックスがないことが問題だったかも知れないという意見もあった。＜「それをＤＶの定義にいれるかどうかは別として」、というのを入れるか？＞

第１１部

①性的関係の強要をたずねているが、その経験がある場合、面と向かって「はい」とは答えにくいのではないか。

②はじめて性的関係を持った年齢も、何歳というより、いくつかの年齢層の方が答えやすい。

（４）調査方法について

この調査は面接調査であり、すべての質問を口頭で読み上げ、口頭で回答してもらうことになっている。実際にプリテストを行ってみたところ、次の様な意見が得られた。

①質問されてすぐに答えなければならないことがプレッシャーに感じ、記入式のものだと、自分で考える時間があり、答えやすい。

②すべて選択肢が用意されているのに、なぜ記入式にせず、わざわざ口頭で調査するのかわからない。

（記入式にすると、別の問題が出てくるので、基本的には面接調査で行い、言葉で答えにくいような部分は、選択肢をカードに書いて提示し、記号で読み上げるなどの方法が考えられよう。）

（５）事前の連絡の仕方および同意書について

ＷＨＤ／ＷＨＯの運営委員会からは、暴力についての調査であることを表に出すと、回答率が低くなる可能性があるので、現段階では、あくまでも「女性と健康」と言う風に出すように、指示されている。プリテストを受けた人の中には、それに疑問を感じ、暴力についての質問もあることがあらかじめ知らされていなかったので、「だまされた」という気持ちになった方もいた。

解決策としては、同意書２のような伝え方で、少なくとも面接の始まる前には、質問内容の全般を知らせることであるが、さらなる検討が必要であろう。

６．プリテストの成果と今後の予定

多国間研究参加国の中で、1998年12月版の調査票を用いてプリテストを行ったのは日本のみである。1999年２月16日から19日、イギリスのロンドンで行われた研多国間研究・研究者会議に、日本メンバー２人が参加し、上記のプリテストで得られた意見を伝えた。会議では、他国の研究者の意見と共に全体で調査票の内容や調査方法について議論する機会もあった。

（１）調査票について、プリテスト協力者の意見はほとんど会議で伝え、そのほとんどは、次回の修正時に考慮されることになった。例えば、第６部の女性の地位についての質問は、かなりの検討を要することについては、他国の研究チームの意見とも一致していたので、大幅な修正が予定されている。第１部のコミュニティーでの「近所とのつきあい」などの質問も、再検討されることになった。また、日本の回答者が疑問を示した「誰が薬代を払ったか」の質問などは削除されることになり、「暴力の被害の有無のチャート」も必要なことだけをたずねるように変更された。

現在、運営委員会とテクニカル・アシスタンス・チームで、これらの案を入れ込んだ修正を行っている。修正版調査票が出来次第、日本チームで再度翻訳版を作成し、２度目のプリテストあるいは、100人程度の無作為抽出サンプルでパイロットテストを行う計画である。

（２）調査方法については、日本チームがよいと判断するのなら、少なくとも日本での調査では、全てを口頭で行わず、カードに選択肢を提示し、あてはまる記号を読み上げてもらう方法などを用いてもよいとの回答を得た。

事前の調査内容についての説明の仕方や同意書で面接の始まる前に、ＤＶを含む質問内容の全般を知らせる可能性については、それぞれの国で、一番よい方法を考えればよい、という回答を得た。今後、日本チームで、同意書と事前の連絡の仕方についてのよりよい方法を検討する。

今回実施したプリテストは、日本の本調査に向けての準備の点でも、ＷＨＤ／ＷＨＯ多国間研究チーム全体の進行にとっても、非常に有意義であった。今後、一般サンプル調査実施に向けて、内容的問題の検討の他、出にくい内容を引き出すという目的や、場合によっては生ずる回答の深刻さなどを考えて、面接だけでない方法との組み合わせ等も念頭に、調査の方法についても充分な検討をかさねなければならない。

このプリテストの面接調査では、27人中８人が夫あるいはパートナーから性的暴力、身体的暴力、あるいは対物破壊の形での暴力を受けた経験があることがわかった。身体的あるいは精神的な暴力を受けた経験がわかっていた方４人に協力をお願いしたことを考慮しても、この数は、ＤＶについての調査研究を進め、対策に結びつくような結果を生み出す必要性を物語っている。この場を借りて、時間を割いてプリテストに協力してくださり、未熟な調査質問に意見をくださり、話しにくいことも話してくださった方々に心より感謝の意を表する。